

令和7年度 訪問看護推事業 訪問看護ステーション支援事業

病院看護師実地研修実施報告会

～実地研修を通じた病院と訪問看護ステーションの 連携と相互理解～

令和8年3月18日

一般社団法人北海道総合在宅ケア事業団 札幌東訪問看護ステーション

管理者 正門 まゆみ

研修の内容及びプログラムの実際

(1) 事業所のオリエンテーション

- ・改めて研修の希望や目標の再確認
- ・管理者により、地域の特徴やその中でのステーションの役割、ステーション利用者や看護の特徴など、資料に基づき実施。

(2) 訪問看護制度について

- オリエンテーションや各利用者での質問などを受け、説明

(3) 地域の在宅医療及び在宅ケアサービスに関する状況

- 同上

(4) 関係機関及び多職種との連携

→使用しているツールや日々の連携方法を説明、見学

(5) 訪問看護の理解～同行訪問、調整会議などの参加～

→同行訪問を1日目2件+2日目3件

希望のあった医療処置のある利用者を中心に選択
1件 介護保険利用者の担当者会議に参加。

(6) その他 研修目的達成のための体験など

→すべて別のスタッフの同行訪問とし、互いに交流や
理解を図るようにした。

実習を通じて学んだ事、今後の課題

1) 現在の病院の看護体制や入退院支援の実際を知り、ステーションとしての連携する際のヒントを得た。

急な退院調整などで回復過程を十分に見届ける前に退院になるケースがあることや、入院中は安全やリスク回避が重視され、「家で暮らす生活者」とであることを踏まえての支援が難しい場合がある現状を聞いた。

それを理解したうえで、利用者・家族がより安心して、在宅⇔病院の移行ができるように、一緒に考え、提案する役割があることを再認識した。

2) ステーションから、在宅療養の姿や可能性を伝えていくことの重要性を再認識した。

病院では「この状態では退院は無理」と言われるような利用者も、様々なサービスを使いながら独居で生き生きと暮らす現状をみてもらうことができた。

ステーションも積極的に「自宅で生活できること」を具体的に伝えていくことが大事と知った。

3) **ステーション職員自身が、受講者を通じて、世代や過去の職場との違いを理解して、相互を尊重したコミュニケーションを改めて学ぶ機会になった。**

病院を離れてかなり経過しているスタッフが多く、過去の経験に基づき、今の病院の現場の状況や特徴、役割を十分に理解しないまま、時に否定的な見方を持つことがある。

過度な期待に基づいたコミュニケーションで「訪問看護師はこわい、緊張する」と言われることもある。

- ・若い病院のスタッフとの連携で「今」を理解し、個々が日々の連携のあり方を考えるきっかけになった。

4) スタッフの行う看護へのフィードバックの効果

同行訪問で、普段スタッフが大事にしている看護を改めて言葉にする機会となり、看護を語ることの大切さを再認識した。また、それを支持してもらえた事がプラスのフィードバックになった。

5) 自分たちの報告書を見てもらっていることを知ったことでモチベーションが上がった。

普段から連携室を通して連携のあった病院からの受講者であり、報告書に全て目を通していただいていると聞き、より利用者の様子が伝わる報告書等の作成を目指そうと再認識した。

まとめ

- ▶ 顔の見える関係になることで、今後のより良い連携に繋がる。
- ▶ ステーションの中にいるだけではわからないことを、病院からの実習者を通じて、私たちも学ぶことができる
「新たな風が吹く」
- ▶ これからもこの研修を通じて、利用者・家族が安心して暮らすために、病院・訪問看護ステーション看護師の相互理解を深め、より良い連携を目指していきたい。

▶ ご清聴、ありがとうございました。